

無想録 十九 自然

春が来て花が咲き、秋が来て紅葉が散る。天地自然の運行がある。花が咲いて天地に銜気げんきもなければ、雪が降って誇り顔もない。

人間のすることには無理がある。

無理のあることは死んでいる。

無理をおし通すことを邪見という。

涅槃経に曰く「一切の悪行は邪見なり。一切の悪行の因無量なりと雖も、若し邪見を説けば、則ち己に撰尽しやうじんしぬ。」と。

恐るべきかな、邪見。

邪見の人、この人こそ、世を苦しめ、暗くする中心となる人である。己一人の勝手のために人を責め、己一人の権力のために、圧制を通す。棺蓋かんふたを覆うて後、この人の柩ひつぎに飾られるものは、唾棄だきと悪罵のそれである。

世に安心のできる人物と、安心のできぬ人物とがある。

自然の公道に終始して、動静自然なる人は安心ができ、表と裏とがあつて、邪見不自然な人には安心ができない。この種の人は必ず、公金を私したり、得手にまいらぬと反逆したり、一の反感によつて、十の恩も百の怨うらみで復かえしたりする。

悪のひそむ時、必ず不自然である。

親鸞聖人は八十六歳の時、自然法爾章をお書きになった。十八願の心を一番はつきり出されたものである。聖人の円熟をとげた信境である。若々しい円まどかな心の全体である。

芽を出した一本の木、それを殺さない以上、その芽を葉を、木の中におしこめるわけにはいかない。

一切の業報を超えて、よびかける真実に生ききろうと、一念、芽をきつたならば、それをもとどおりにおしとめるわけにはゆかない。「他力といふは如来の本願力なり。」その自然の本願力は、いかに碍さまたげても、おしこめても、不退である、無碍である。

一茎の草花にも天地の全体が孕はらまれてあるように、一人の人の上に芽生えた願生の魂の上には、尽十方無碍光如来の力が打ち込められているし、無量寿の生命が流れている。

私は悪人であります。いつ何をした、今日こんな悪い心をおこした。それを、そこをお助け下さるのがお慈悲だと、とつてつけて喜んでいる人が多い。けだし二十願の

だましもので、痩せた体に滋養物をすりつけて喜んでいるようなものである。不自然のことこの上なしである。

二十願の世界でかたまると再び濟度ができなくなる。聞いていても、気に入る処だけ聞く。

「先生、罪悪を説いて、弥陀の本願に毛一本加えられない所をやりんさいよ。わしらは、そこは出とるが、同行等が可愛いから」と、天晴あっぱれお同行が言った。気の毒なことながら、この種のお同行を見つめてごらん。仏の生々しい血潮の流れは見られないから。入学すべきものが卒業したのだ。

一つの型がある。それを後生大事に持つておつて、それに合わせて見る。少しでも型が崩れそうだと、講師の方へケチをつけて「異安心」だと言う。これが一番多いのが安芸や石州である。石州でなくても、至る所に自然の生命の枯れた型いじりが満ちている。

自然は生命の内部から必然に動き出る力である。

聞くことによつて、自力の大地を破つて、願力自然の信の生活が生まれる。

この真如一実功德宝海の内奥から生まれた願力自然の力と一体でないかぎり、けつして救われたと言わない。仏教は極難信である。

茶道でも、作法でも、獲得されると、型に入つて型を出す。得たとは、自然になりきることである。ほんとの自然は平凡であつて非凡である。非凡にならなければ、平凡にはなれない。

映画を見にゆく。銀幕上の人たちは泣いているのに、見る方は眠たくなる。

映画に無理があるからである。作つて泣いているからである。もう一つはつきりとした論理の骨格がないからである。

はつきりとした論理の骨格が内にあつて、血と肉が盛つてある時、あまりに自然で、観ていること、泣いていることすら忘れていく。

聖人は自然法爾の信を絶唱されたが、しかし、その背後には、教行信証の骨格があつた。

論理をきわめて論理を超えはてたところに、自然法爾の信がある。

聖人が幾百年の後、真に人生を生きようとする人によつて絶対の尊重帰依を受けられるのは、その生活一切が高き自然の領域から生れ出ているからである。

何も仕事をしなかつたはずの父、何事も言わなかつたはずの父が、死後七年、地上のだれよりも、私の精神内容に迫ってくるのは、無理がなかつたからだ。如来願力の自然だからである。

真の迫力は、自然にあふれた力の上にもある。

迫害してみても、排斥してみても、自然の迫力の前には頭の上がりようがない。声が大いなのが力でもない。策略が力でもない。自然の迫力は、そんな稚気からは生まれない。

自然の力が流れている以上、必ず枝が伸び、葉が茂り、花が吹く。これ私が、若人たちに、何をせよというよりは、自然の力の満ちた信の人、腹の人を作ろうとするゆえんである。

一切の重圧をはねのけて、起ち上がって生きる人物が、私の話を聞いてくれた人の中から現れるはずだ。その人たちが、あらゆる社会相の中に食い込んで生きた仕事をしてくれる、私の真の喜びはそこにある。

生き方が自然だと、生活が遊戯ゆげさんまい三昧になる。

私は今日まで私の力一ぱいやらねばならぬようなことに出遇つたことは一二回しかない。

しかし、考え方を変えると、獅子が兎一匹とる時も全身の力を用いるように、私は一切の生活に、例えば老婆一人と座談する時でも、私は私の全体を打込むことを心掛けている。

自然だと力みがない。どんな大問題に打ちあたつても、力みかえさなくてもいいよ
うな人になりたい。

垣根の瓢箪を見てさえ、武士の命たる刀をひきぬいて斬つた武士、飯のたき方がま
ずかつたとして妻をたたく男、自分の力一ぱいを毎日使っている。

書道でも、茶道でも、武道でも、話術でも、皆その極意は自然である。宗教もとよ
り自然である。箱から出され、鎖をきられ、自由な天空に放たれた時、だれ一人見て
いない時、白刃の下に立つ時のように余裕も何もない苦悩がおしよせた時、何が一体
飛び出すか。その時、そこに生きていたものだけが汝の真の汝である。

信仰は自然法爾だとはまことに至言なるかなである。
箔はくやお化粧は自然ではない。